（その 10）

区画整理で消えてしまう「川津」のこと

「田中野田」にまつわる昔の話を、まとまりもなく書かせてもらっているが、皆さんはどのように感じて下さっているのであろうか。気にはしているのである。ただ、年寄りが、昔のことを少しでも今の人に伝えておきたいとの思いが、こうさせているのだと、おおらかな気持ちで受け入れてくださるよう、お願いする次第。

さて、今回も前号に続いて川に関係することである。上掲の写真をみていただきたい。川縁にある石段である。このような場所を一般には「川津」（かわつ又はかわず）と呼ばれているが、この地方では、この言葉が「かわち」になまり、さらに岡山弁で「カウェーチ」と呼んでいる。（広辞苑では「川津」のことを「川辺の物洗い場」とある。）

とにかく、この地方は、水田稲作農業地帯であったから、用水路は欠かせなかったのであるが、生活の面でも水とは切り離せなかった。このため、昔は、家を川の近くに建てた。そして、「せんたく」や「もの洗い」はこの川を利用した。（井戸は各戸にはなかった次期もあったし、あっても主に、飲み水・風呂水・すすぎ水に使った。）この川への降り場としてつくられた足場が「川津」である。当時は各戸にあった。

この地方に上水道が敷設されたのは、昭和6年である。それ以後、水道によるきれいな水がふんだんに使えるようになってからは、「川津」の必要性が次第に薄らいでゆき、現在では、この地区でもわずかしか残っていない。この「川津」も、区画整理でいずれは完全に姿を消すことになろう。（原　好幸さん宅南側の「川津」だけは、残してもらえるかもしれない。）

私には、この「川津」に忘れることのできない思い出がある。幼少の頃、家の裏の「かわち」で遊んでいて、不覚にも2度も川へ転落した。溺れているところを助けてもらったわけであるが、一度は意識不明になり、数分で命を失うところであった。まったく命びろいしたのである。今日まで生きのびたのは私の人生は、神さまと地域の皆さんのお陰であると、いまも感謝しているのである。

平成元年10月号　第12号
（　中　尾　　佐之吉　）